



アイマラ語とケチュア語の 語り論の構築に向けて 「口承文学」と「オーラルヒストリー」のあいだで

第15回アンデス・アマゾン学会研究大会

藤田 護 (FUJITA, Mamoru)

Taller de Historia Oral Andina

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部

2026年7月12日(日)、三重県教育文化会館

はじめに

本発表の目的

- アイマラ語とケチュア語の口承の語りについて、
 - (1) 引用の形式
 - (2) 動詞の活用(時制)の種類
 - (3) 伝聞を示す接尾辞に着目し、比較・検討する
→「証拠性(evidencialidad)」と呼ばれるカテゴリー
- 言語学が証拠性に関心をもつ場合、各形式が個別に取り上げられて記述される傾向がある(Urban ed. 2024など)
→これらの形式がどのように組み合わされて口承の語りが展開していくか？
- 本来は「物語世界」までの射程をもつ議論にしたい(存在論的転回)
(上原2022、藤田2023など)
語用論的多様性(Howard、Mannheimなど)はいったん置いておく
以下は「地の文」についての議論(登場人物の「台詞」は置いておく)

ジャンル分類についての留意点

- ジャンルとしては「口承文学(口承文芸)」と「オーラルヒストリー」に着目する
- アンデス高地のアイマラ語とケチュア語にとって、「証拠性」という観点から重要になるのは、
 - (1) 自身が直接体験した事柄であるか
 - (2) 他人から伝え聞いた事柄であるかという軸であり、その区別に従って、異なる文法形式が用いられることになる
- オーラルヒストリーにおいても、語り手が自身の見聞していない祖先のことやさらに古い伝承を語ることがあるし、口承文学においても物語と語り手の生きた経験とが接合されることが往々にある
- したがって、語りの文体の区別は、「口承文学(口承文芸)」と「オーラルヒストリー」という区分と必ずしも重ならない

1. 口承文学の語りの文法と文体

アイマラ語とケチュア語の長い接触の歴史

- 子音で帯気音と放出音を区別するのは
(例えばkaとkhaとk'aを区別するのは)
アイマラ語と南の方のケチュア語が共有する特徴である
クスコのケチュア語(quechua cusco-collao)にはこの区別はあるが、アヤクー
チョのケチュア語(quechua chanca)にはこの区別がない
- アイマラ語もケチュア語も動詞の「活用語尾」(屈折)が主語と目的語の両方を
反映するが、このことはほぼ全地域のケチュア語で共有されており、これは古
い時代の影響だと考えられている。これらのケチュア語の特徴は、それぞれが
アイマラ語からの影響で取り込まれたものだと考えられている(Adelaar 2020)
- なお、両言語では相当数の基礎語彙が共通しているが、これについてはアイマ
ラ語がケチュア語から取り込んだものだと考えられている(Adelaar 2020, Emlen
2017)

1. 口承文学の語りの文法と文体(アイマラ語)

- 口承の物語を語る際の文体は、アイマラ語の場合には、
(1) 動詞の「遠隔過去 (remote lejano, distal past)」の活用 of -tayna
(2) 動詞saña「言う」の3人称の活用形si
の組み合わせで語られていく
- アイマラ語の遠隔過去の活用は――

	単数	複数
1人称	-täta	-pxatäta
2人称	-täta	-pxatäta
3人称	-tayn/-tän	-pxatayn/-pxatän
4人称	-tätan	-pxatätan

という形をとる。

1. 口承文学の語りの文法と文体(アイマラ語)

➡【引用1】Akjamätaynaw siw ukax. Mä jaqi mä phuchhanitänaw siya, phuchhani, chachawarmi ukat mä phuchhani. Ukata uka phuchhapaw usuri uñstxatän siy, usuri, embarazada. Ukat embarazata uñstxchi, ukat jichha usxatänaw siya.

➡【訳】Así **había sido, dice** eso. Una persona **había tenido** su hija, **dice** pues, con hija, marido y mujer y después con hija. Después esa su hija **había aparecido** embarazada, **dice** pues, embarazada, embarazada. Después aparecería embarazada, y ahora ya **había dado luz, dice** pues.

それはこういうことだったのだと言う。ある人に一人の娘がいたのだと言う、娘がいた、夫婦、そして一人の娘がいた。そして、その娘が妊娠したのだと言う、妊娠、妊娠した。そして妊娠した姿になり、そしてもう出産したのだと言う。(タピア・デ・アルバレス、サラビア・パロミーノ、タピア、藤田2015。ラパス県ムリーリョ郡リオ・アバホ溪谷)

1. 口承文学の語りの文法と文体(ケチュア語)

- ▶ 口承の物語を語る際の文体は、ペルー南部のケチュア語の場合には、
 - (1) 動詞の「伝聞過去 (reportative past, narrative past)」の活用 of -sqa/-sqa(n)ku
 - (2) 伝聞を示す接尾辞-s(母音の後で)/-si(子音の後で)の組み合わせで語られていく
(ボリビアのケチュア語では(2)が異なることを後で見る)
- ▶ ケチュア語の伝聞過去の活用は――

	単数	複数
1人称	-sqani	-sqayku (排除形)←または「1人称複数」 -sqanchis(包摂形)←または「4人称」
2人称	-sqanki	-sqankichis
3人称	-sqa	-sqaku

1. 口承文学の語りの文法と文体(ケチュア語)

- ➡ 【引用2】Urqupis atuq ukuchawan tiyasqa. Ninakusqaku “kumpari, kunanmi santunchik” nispa. Atuqñataq nisqa, “kumpari, hitarrata tukamuchkay”. Hinaspañataqsi ninawan kañaykusqa.
- ➡ 【訳】En el cerro, **dicen**, un zorro con un ratoncito **había vivido**. Entre ellos **habían dicho**: “compadre, ahora es nuestro santo (cumpleaños)” diciendo. Y el zorro ya **había dicho**: “compadre, guitarra vienes tocando”. Y siendo así, **dicen**, con el fuego la **había quemado**.

山に、聞くところでは、キツネがネズミと住んでいたのだそう。彼らの間で話し合ったのだそう。――「もう自分たちの誕生日だな」と。そしてキツネが言ったのだそう。――「ギターを弾きながら来いよ」。そして、そうして、聞くところでは、火でもってそれ[ギター]を焼いたのだそう。

(Durstun, Itier, y Landeo Muñoz (2024[1957-58]), p.67。アヤクーチヨ県南部。スペイン語訳は発表者が改変した。)

1. 口承文学の語りの文法と文体(比較)

- ケチュア語の-sqaは過去分詞を形成する接尾辞でもあり、「伝聞過去」の活用はこれに人称を示す語尾が付いたものである。
→この動詞の伝聞過去の時制(活用、屈折)は過去分詞を土台としてもつようだ
- そう考えると、アイマラ語の-taも過去分詞を形成する接尾辞であることに気づく
→「遠隔過去」の活用におけるその後ろの1人称、2人称、4人称の-`ta(n)(`は長母音化を示す)は過去分詞を動詞化して、各人称を示す語尾をつけたものだと考えられそうだ
〈参考〉アイマラ語では、過去分詞を形成する接尾辞が動詞を名詞化するはたらきをもち、名詞は最後の母音を長母音化することで動詞化することができる。
- ではアイマラ語の遠隔過去の3人称の形は.....
南のオルーロ・ポトシのアイマラ語では-täwiまたは-täxiとなることが知られる
→場所化(localizador)の接尾辞-wiや完了(completivo)の接尾辞-xaと見なせる(Briggs 1994)
- 北のラパスのアイマラ語の-tayna/-tänaは、-tänaが元であると考えたと.....
過去分詞に近接過去(remoto cercano, proximal past)の3人称活用語尾-`naが付いた？
→すると、-taynaの形は発音を楽にするためyの音が後から挿入された形か
→ラパスのアイマラ語の遠隔過去-tayna/-tänaは、過去分詞を通じて出来事の伝来(伝承されてきた出来事であること)を示しつつも、同時にそれを過去のこととして留めおこうとする二重の働きを示すようだ

1. 口承文学の語りの文法と文体(比較)

- ペルー・ケチュア語の語りの文体を構成する「伝聞」を示す接尾辞の-s/-siは.....
接尾辞の体系としては「確証」を示す接尾辞の-m(または-n)/-miと対比される
- この接尾辞-s/-siは、文の様々な要素の後について、その情報が直接体験したものでなく伝聞であることを示す(特に接続詞的に用いられる指示語や、副詞的に用いられる動詞と接尾辞の組み合わせの後ろにつく)
- これはアイマラ語の動詞sañaの3人称単数の活用形であるsiと大変よく似た音になっている
(ちなみに確証を示す接尾辞-m(または-n)/-miは、これまたアイマラ語の確証を示す文接尾辞-w(a)と大変よく似た音になっている。)
→これらのケチュア語の接尾辞は、アイマラ語の動詞の活用形や文接尾辞の音がケチュア語に接尾辞として取り込まれたものではないか？
- 動詞の活用の体系についても、先にアイマラ語で過去分詞を土台として発達した動詞の形態を、ケチュア語が過去分詞であることを維持しつつ、より単純化された形で取り込んだと言えそうである

2. 古典日本語と日本語の口承文学へ

- 藤井貞和による古典日本語と日本語の口承文学の文法——「文法的詩学」
- (1)「助動詞」「助詞」と呼ばれてきた品詞を、「詞」と「辞」を区別する時枝誠記の言語学に着想を得て、「助動辞」「助辞」と呼ぶことにした上で、
 - (a) 古典日本語の助動辞「き」は時制として厳密に過去を示すのに対し、
 - (b) 「けり」は過去の「き」に「あり」が接合し、ki-ari→keriという音韻変化を生じたもので、時の伝来を示す（藤井2010、第2～3章、藤井2024、第4～5章）
→「けり」は彼方なる時間を現在に呼び込む役割をもつ
 - (a) 「き」が『古事記』や『日本書紀』などの叙事文学を特徴づけるのに対し、
 - (b) 「けり」が『源氏物語』などの物語文学を特徴づけるとする（前掲書）
- (2)「けり」を主に用いつつ展開する物語文学の文体と、
「～て」「～と」（あつたってや、上げててんて、あつたずもな、来たど、など）の、伝聞であることを「しつこく話者は繰り返す」（藤井2024、p.104）口承文学の語りとが、実質的に同じ役割を果たしていると指摘する
- (3)「ぼくはウサギだ」における「ぼく」という「語りに現れる人称」（ここでは1人称）と、「ぼくはウサギだ」と語る語り手存在の人称を区別し、後者を（時枝誠記の「零記号」の概念を応用し）「ゼロ人称」と名づけ、これと関連して、名詞や動詞や形容詞などの「詞」に見える文法論理と、助動辞や助辞などの「辞」に見える語り手の主体的表現の文法を区別する→助動辞や助辞選択に主体的表現、すなわち詩学が見てとれる

2. 古典日本語と日本語の口承文学へ

- アイマラ語もケチュア語も、過去分詞を土台とした動詞の活用(時制、屈折)を用いるが、過去分詞とはある行為が過去に実現してその状態が現在まで続いていることを示すものである
→すなわちそれは、過去の時間を現在に呼び込む役割を担っている
すなわち、アイマラ語やケチュア語の過去分詞を土台とした動詞の活用(時制、屈折)は、古典日本語の助動辞「けり」と似た役割を担っている
- ただし、アイマラ語については、遠隔過去の動詞の(特に3人称での)活用が過去の時間を現在に呼び込みつつ、しかしそれが過去の出来事であるとして、現在から切り離すはたらきも同時にしているという複雑さをもつ
- アイマラ語やケチュア語においても、これらの口承の物語の語りの形式(証拠性の形式)を通じて、語り手が過去の複数の声の糸を現代に手繰り寄せていると考えることができる(藤田2014)

よく考えてみると……

- 「けり」が過去の時間を現在に呼び込む役割をもつ助動辞であるのは良いとして、、、
- 日本語の口承文学の文体に見られる、「～て」「～と」(あったってや、上げててんて、あったずもな、来たど、など)の引用を示す形式は、語り手が過去の発話を現在に呼び込みつつも、それが自分(あるいは現在)とは切り離された過去のことだ(伝承されたものだ)という距離を示そうとしているのではないか？

3. アンデス高地の口承文学の文体がもつ地域差 (ケチュア語の-si/-s)

- ▶ ペルー南部のケチュア語においては、過去分詞を基盤とした-sqa/-sqakuの動詞活用が広範に使われるが、物語の冒頭では-sqa/-sqakuが-s/-siと併用されても、次第に-sqa/-sqakuが姿を消していき、動詞の単純時制と-s/-siが組み合わせられるようになることが多く、そもそも-sqa/-sqakuが用いられないこともある (Gutman 2023, Itier 2007, Délétroz Favre 1993)

- ▶ 一つの物語の語りはじめ――

【引用3】Urqupis atuq ukuchawan tiyasqa. Ninakusqaku “kumpari, kunanmi santunchik” nispa. Atuqñataq nisqa, “kumpari, hitarrata tukamuchkay”. Hinaspañataqsi ninawan kañaykusqa. (Durstun, Itier, y Landeo Muñoz, 2024[1957-58], p.67)

【訳】

En el cerro, dicen, un zorro con un ratoncito había vivido. Habían dicho entre ellos “compadre, ahora es nuestro santo (cumpleaños)” diciendo. Y el zorro ya había dicho, “compadre, guitarra vas a venir tocando”. Y siendo así, dicen, con el fuego la había quemado.
山で、聞くところでは、キツネがネズミと暮らしていたのだそうだ。お互いに言ったそうだ、「もう我々の誕生日だぞ」と。キツネはもう言ったそうだ、「ギターを弾いているといいぞ」。そうして、聞くところでは火でそれを燃やしたのだそうだ。

- ▶ ここでは伝聞を示す接尾辞-s/-siと物語過去の-sqa/-sqakuが両方とも用いられている。

3. アンデス高地の口承文学の文体がもつ地域差 (ケチュア語の-si/-s)

▶ 同じ物語の語り終わり——

【引用4】Hinaspas mancharikun. Hinaptinsi pilunpas sayaririrparinraq. Hinaptinsi rimapakun “ampi kaspanchá purikuchkan kaypi wakpi”. Hinaspasi nin “amaña kumpari puriychu, manachu saykunki? Samakamuyña, mana chaypachaqa diyuspa kastigasunkimanmi” nispas nin, hinaspa pasakun. (ibid., p.69)

【訳】

Siendo así, **dicen**, se ha asustado. Siendo así, **dicen**, su pelo también se ha parado todavía. Siendo así, **dicen**, mucho ha hablado, “zonzo siendo se está andando aquí y allá”. Siendo así, **dicen**, ha dicho “compadre, ya no andes, ¿no te has cansado?. Descansa ya, sino el dios también te puede castigar” diciendo ha dicho, siendo así se ha ido.

そうして、聞くところでは、恐れをなした。そうして、聞くところでは、自身の毛ももう逆立った。そうして、聞くところでは、いろいろとしゃべった「バカみたいにあちこちを歩いているよ」。そうして、聞くところでは、こう言った「もう歩き回るなよ、疲れないのか？もう休みな、そうでないと神がお前を罰するぞ」と言い、そして行ってしまった。

- ▶ 伝聞を示す接尾辞-s/-siは維持されつつ（太字＋下線）、動詞の活用の方は単純時制が使われるようになっている（下線）。証拠性（情報源）についての語り手の判断が変わったとは考えにくく、伝聞の接尾辞-s/-siの方が語りの土台にあって維持される傾向にあり、動詞の活用-sqa/-sqakuはむしろ後からケチュア語に取り込まれたもので、冒頭ではそのように語られつつも途中で放棄されやすい傾向をもつと言えるのではないだろうか。

3. アンデス高地の口承文学の文体がもつ地域差 (ボリビアのケチュア語のniy「言う」)

- ▶ また、南部アンデス高地の南側のボリビアに相当する地域では、ケチュア語の文体にペルーと異なる特徴がみられ、伝聞を示す接尾辞-s/-siが用いられず、アイマラ語での動詞saña「言う」の使用と同様に、動詞niy「言う」が用いられる――

- ▶ 【引用5】Payqa puñuylla puñukusarqa uk sach'a ukhupi nin. Intunsis, uk kundur rikusqa. “Kay runaqa wañusqa jina wiqch'uyarasan kay pampampi, nuqanchis mikhurqapusun”. Intunsis, phawaspa waq askha kundurta waqyamusqa, chay kundurkunaqa qallarinkupaqqa qhawarissqanku. (Jemio González 2023, p.101)

【訳】

Él (un joven flojo) solo dormía y dormía debajo de un árbol, dice. Entonces, un cóndor le había visto: “Este hombre como muerto está botado en esta pampa, nosotros lo vamos a comer”. Entonces, volando había ido a llamar a varios cóndores. Antes de empezar a comer, esos cóndores primero le habían mirado.

彼[怠け者の若い男]はひたすら眠ってばかりいた、その木の下で、と言うんだ。そして一羽のコンドルが姿を現したそうさ、「この男は死んでいるかのように伸びている、この平原で、私たちが食べてしまおう」。そうして、飛びながら他の何羽ものコンドルを呼び寄せたのだそうさ、そのコンドルたちは食べ始めるにあたり、その男をよく見たのだそうさ。

※タラブコはチュキサカ県にあり、スクレ市の近くである。

- ▶ スクレだけでなく北部ポトシ (Norte de Potosí) で記録された伝承にも同様の特徴がみられる (Nicolás, Zegarra Quintanilla y Puma Layme recopil. 2004, p.68)

3. アンデス高地の口承文学の文体がもつ地域差 (ボリビアのケチュア語のniy「言う」)

- ▶ ペルーからボリビアにかけてのケチュア語の語りには三層の違いが存在することになる
 - (1) ペルー南部からペルー中北部まで広範に共有された-s/-si
 - (2) ボリビアを含めペルー南部からアヤクーチョの南までは使われている-sqa/-sqaku(ボリビアでは-sqanku)
 - (3) ボリビアでしか用いられない動詞niy「言う」
(チチカカ湖東岸で用いられるかは要確認)
- ▶ それぞれがアイマラ語の語りの文体との類似性をもち、歴史の異なる段階で接触していたアイマラ語(またはアイマラ語祖語か祖祖語)からケチュア語(またはケチュア語祖語か祖祖語)に取り込まれたのではないか？

4. オーラルヒストリーの文体へ

- オーラルヒストリーの語りにおいては、自分が直接体験していない歴史も、自分が直接体験した出来事も語られることになる。
- アイマラ語の場合は、単純形 (tiempo simple)、習慣的行為を示す接尾辞-iriを用いた形、および近接過去形 (remoto cercano) が用いられることになる――

単純形

	単数	複数
1人称	-ta	-pxta
2人称	-ta	-pxta
3人称	-i/-u	-pxi
4人称	-tan	-pxtan

習慣的行為

	単数	複数
1人称	-irita	-pxirita
2人称	-irita	-pxirita
3人称	-iri	-pxiri
4人称	-iritan	-pxiritan

近接過去

	単数	複数
1人称	-yäta	-pxayäta
2人称	-yäta	-pxayäta
3人称	-än(a)	-pxän(a)
4人称	-yätan	-pxayätan

4. オーラルヒストリーの文体へ

- ケチュア語の場合は、単純形、習慣的行為を示す接尾辞-qを用いた形、および過去の接尾辞-ra (または-rqa)を用いた形が使われることになる――

単純形

	単数	複数
1人称	-ni	-yku (排除) ←「1人称複数」 -nchis (包摂) ←「4人称」
2人称	-nki	-nkichis
3人称	-n	-nku

習慣的行為

	単数	複数
1人称	-q kani	-q kayku (排除) ←「1人称複数」 -q kanchis (包摂) ←「または4人 称」
2人称	-q kanki	-q kankichis
3人称	-q	-q kanku

※-qは行為主体を形成する接尾辞(agentivo)、後ろはコピュラ動詞(つなぎ動詞)kay

過去

	単数	複数
1人称	-r(q)ani	-r(q)ayku (排除) ←「1人称複数」 -r(q)anchis (包摂) ←「4人称」
2人称	-r(q)anki	-r(q)ankichis
3人称	-r(q)an	-r(q)anku

4. オーラルヒストリーの文体へ(伝聞の歴史)

- オーラルヒストリーにおいても、自分自身が体験したことではない場合には、伝聞の文体で語ることになる。神話的伝承の場合には、口承文学の語りと変わらない(例: *Gregorio Condori Mamani*冒頭におけるインカが風を封じ込めてクスコの街を建設した伝承—Valderrama y Escalante 1981[1977])
- これはそのような歴史上の伝承(神話)でなくとも、自身の両親のことであっても、自分が直接見聞きしていない場合は、似たような文体が用いられることになる——
- 【引用8】Ñaawpaqqa paykunaqa khuyay kasqaku. Mañasqa uywallata michiqku, papapaq wanu astakunankupaqpas llank'apakusqaku, chaytaq yanapasqaku. Taytakuywa wawqin Benito Tarapaki karqan, qhari mana wawallayuq. Anchaypuwan uywakuwaraqanku ñuqaykutaqa.
Antes ellos fueron pobres, pastaban ganado prestado. Para la siembra de la papa conseguían guano a cambio de trabajo. El hermano de mi padre era Benito Tarapaki, hombre sin hijos. También él nos crió a nosotros. (Valderrama y Escalante 1992, p.7)
【訳】
以前は彼らは貧しかったのだそうだ。借り受けた家畜ばかりを放牧していた、ジャガイモ[の植え付け]のために肥料と交換するために働いていたのだそうだ、それを手伝いをしていたのだそうだ。父親の兄弟はベニート・タラパキであった。子どものない男で、そいつと育てたんだ、俺たちのことを。
- ここでは伝聞を示す文体と(太字+下線)、自身で確実な事柄として語る文体(下線のみ)が混在している。これはおそらく伝聞による情報と自分が確実に知っていると思う情報とが入り混じって交錯しているからであろうと推察できる。

4. オーラルヒストリーの文体へ(伝聞の歴史)

■ アイマラ語の場合

- 【引用9】[...] patrón, patrona, aynachanx. Ukata isti..... jaqinakaru trawajayirín siy, patrunatakixa payüruw lurañayir siwa, istitakixa jiwasatakixa, jupatak jaqitakixa kimsüruraki, ukham. Ukjam lurapxiritän taqi jaqi, ü.

【訳】

[...] patrón, patrona, en abajo. Después este... a la gente sabía hacer trabajar, dice pues, para la patrona, dos días se tenía que hacer, dice, para este... para nosotros, para él, para la gente tres días también, así. Así había sabido hacer toda la gente, sí.

領主、女領主が、その下の方のな。それからその...アイマラの人々を働かせていたと言うんだよ、女領主のためには二日しなければ[働かなければ]ならないようにさせていたと言うんだ。その...我々のために、彼に、アイマラの人々には三日、そんなふうだ。そういう風にしていたそうなんだ、アイマラの人々は皆、うん。(タピア、タピア・デ・アルバレス、藤田2023、pp.28-9)

- ここでは、伝聞を示す動詞saña「言う」の活用、および遠隔過去の形が使われているが(太字+下線)、同時にsi「～と言う」が使われる際の内容自体には、直接体験した文体が使われている(下線)。【引用1】においては、si「～と言う」とされている内容にも遠隔過去の動詞の活用が用いられていたことを思い起こすならば、ここでの表現では語り手にこの話を伝えた者(おそらくは語り手の母親らしい)は、これらの事柄を直接体験していることが示されているようで、語られている経験の時間的近さを示していると考えられる。

4. オーラルヒストリーの文体へ（伝聞の歴史）

- オーラルヒストリーにおいては、語り手自身が経験していない事柄であっても、古い過去（神話的過去）の場合や、両親の世代の場合など、語り手自身からの時間的距離に応じて複数の文体が使い分けられているようだ。そのなかでも、アイマラ語の形式のほうが伝承経路の区別が明確に示されていると言えそう

4. オーラルヒストリーの文体（直接経験した歴史）

- 実際の自分が体験した昔の話になると、ケチュア語の場合には、出来事は過去を示す接尾辞-r(q)aを用いた形か単純時制で、そしてその当時の状況は習慣的行為を示す接尾辞-qと動詞kayの組み合わせで語られる。単純時制も（現在の事柄だけでなく）既に終わった事柄も表現することができる。
- グレゴリオ・コンドーリのオーラルヒストリーの冒頭——
【引用10】Aqupiyamanta kani, ñan tawa chunka wataña llaqtaymanta chayamusqay, Gregorio Condori Mamani sutiy. Llaqtamanta hanpurani mana mamay tatay kaqtin; totalmente q'ara, wakcha, madrinaypa makinpi karani. Paymi chukchayta rutuwaran, hinaspa huk p'unchay hatunchaña kashaqtiy niwaq:
- Ñataq hallpayuqña kanki, tullu takyasqa, chayka llank'qami rinayki.
Soy de Acopía, me llamo Gregorio Condori Mamani, y hace cuarenta años que llegué de mi pueblo. Vine de mi pueblo porque no tenía padre ni madre. Era totalmente pobre y huérfano y estaba en poder de mi madrina. Ella me cortó los cabellos; y un día cuando ya era grandecito, me dijo:
- Ahora que ya tienes fuerzas y los huesos duros, tienes que ir a trabajar. (Valderrama y Escalante 1981[1977], p.18)
私はアコピアの出身で、名前はグレゴリオ・コンドーリ・ママニで、40年前に自分の村から[クスコの街に]着いた。父親も母親もいなかったのだから村から出てきたんだ。私はひどく貧しく、みなしごで、マドリーナの支配下にあった。彼女が私の髪切りの儀式をしてくれて、ある日のこと、もう私が少し大きくなった頃に私に言った——「今やもうおまえは力もあり、骨格もしっかりした。働きに出なければならないよ」
- ただし、ここの習慣的行為を示す接尾辞-qと動詞kayを組み合わせた形の使用は、それほど自明ではない。当時の継続や反復した行為を示すというよりは、語り手を養育していたマドリーナによる一回の発言を示しているようだ。（ただし、このような用例は決して多くはなく、多くの使用例は過去の継続や反復した行為を示す）

4. オーラルヒストリーの文体（直接経験した歴史）

- アイマラ語による語りでも、話者が直接体験した過去を示す動詞の活用（近接過去）-än(a)と、習慣的行為を示す接尾辞-iriが使われるのは、ケチュア語と同様である
- ただし、習慣的行為を示す接尾辞-iriが一回の行為においても使われるという注目すべき傾向がみられる。この点は、アイマラ語の場合には以前からプーノ県におけるオーラルヒストリーにおいて指摘されてきたが（Briggs and Dedenbach-Salazar 1995, p.13）、発表者（藤田）の記録においても同様の傾向確認できる――
- 【引用11】Jall ukjitaruw puripxirît, parkiw ukawjitar, ukjar puripxirît. Ukjat uñtanipxit sultarunakax wäl jalanipxiri yast sirwt'apxirît, janiw ancha jat..... junt'ux kalt, tiwyasitak apapxirita.
【訳】
Ahicito sabemos llegar, el parque ahicito, ahí sabemos llegar. De ahí nos han mirado, los soldados bien saben correr, ya sabemos servir, no muy caliente el caldo, tibiecito sabemos llevar.
もうその場所に私たちは行ったんだ、あの斜面になっているところ、そこに到着したんだ。そこから私たちのことを見たんだ、兵士たちはよく走ったんだ、もう私たちは給仕したんだ、スープをあまり熱くしないで、ぬるいくらいでだけ持って行ったんだ。
（Asunta Tapia de Álvarez、2011年8月28日録音、『アンデス・アマゾン研究』第10号投稿準備中）
- これは1946年にボリビアの当時のグアルベルト・ビヤロエル（Gualberto Villarroel）大統領の政権に対する抗議運動が暴力的対立に展開していく段階の記憶であり、ビヤロエル大統領はこの後にムリョ中央広場で殺され、吊るされることになる。これはやはり習慣的行為とは言いづらく、一回的な出来事の記憶であると考えられよう。

4. オーラルヒストリーの文体（直接経験した歴史）

- ➡ 逆に近接過去 (remoto cercano, proximal past) が背景状況を示すために用いられるように思われる――
- ➡ 【引用12】Uka paqallq maranit̃ ukan trawajwayta ukat..., padrinuxax wali qhurünw... janiy, marinaxa wali qhurünw, parinuxa suma jaqinw, wali suma jaqinw,
【訳】
Eso siete años tenía y ahí he trabajado, después... mi padrino bien malo era... no, madrina bien mala era, padrino buena gente era, muy buena gente era,
それは私が7歳で、そこで働いたんだ、そして.....私のパドリーノは、とても性悪だったんだ
.....ちがう、私のマドリーナがとても性悪だったんだ、パドリーノは良い人だったんだ、すごく良い人だったんだ、(Asunta Tapia de Álvarez、2011年8月28日録音、『アンデス・アマゾン研究』投稿準備中)
- ➡ この近接過去の形は語りの冒頭だけに用いられ、途中から習慣的行為の形のみが用いられるようになっていく。この、ある種の「逆転現象」と受け取れそうなものについては、まだうまい説明が見つからない。

ここまでのまとめ

- (1) アイマラ語とケチュア語の口承の語りは、非常に近い特徴をもっている。
- (2) 口承文学の語りについては、それぞれが過去分詞を土台とした動詞の活用(時制)を用いており、これは古典日本語の助動辞「けり」と類似の特徴をもつ。
- (3) 口承文学の語りにおいては、アイマラ語とボリビアのケチュア語は「言う」を意味する動詞saña/niyを用い、ペルーのケチュア語の接尾辞-s/-siもアイマラ語のsañaの活用に由来するのではないかと思われるが、これは日本語の口承文学の「～とさ」などの語りと共通のはたらきをすればいいのだが、動詞の活用と組み合わせるアイマラ語とケチュア語の方が、より複雑なしくみをもっている。
- (4) オーラルヒストリーにおける語り手が直接体験しなかった出来事の語りは、アイマラ語でもケチュア語でも、語り手の現在からの距離によって文体が使い分けられているようだ。アイマラ語のほうがその時間的距離が一貫した形式で提示される。
- (5) オーラルヒストリーにおける語り手が直接体験した出来事の語りは、アイマラ語の語りにおいて、習慣的行為を示す形態が一回的な行為に用いられ、また直接体験したことを示す動詞の活用(時制)が語りの背景情報を述べるために冒頭のみで用いられがちであるなど、本来の文法的役割とされるものとのあいだで食い違いがあるように見える。